

我心目中的笹川医学奨学金制度

阿倉 英美 第9期笹川生

18年前、私の母国がまだ世界に扉を開け始めたばかりの頃、私は幸運にも中国衛生部「笹川医学奨学金制度」により来日することになりました。当時、自分は吉林省延吉市の、生まれ育った町で看護学校を卒業後、延辺医学院附属病院に入職し、神経内科・循環器・呼吸器・血液病棟に勤務していました。二十年近く毎日臨床にて入院患者たちと接しながら若くし助からなかった無数の方々のことから、医療がどこまで命を救える？病気の本質とは一体何に？という疑問を常に抱えざるを得ませんでした。

1987年頃、国は対外開放の時代に入り、外国語を勉強することが可能となり、語学が好きだった私は、日本語に漢字があること、朝鮮族の日常会話には日本語の単語がそのまま混じっていて、幼い頃父親が少し酒を飲み気分が弾んだ時には決まって日本語で「鳩」の唄「ぽっぽっぽ一鳩ぽっぽ一豆がほしいか、そらやるぞー」と歌っていて子供ながら不思議に思ったことが後の日本語を学ぶきっかけとなり、独学により日本語の勉強をし始めました。2年後、吉林省の「笹川医学奨学金制度研究者」選別入試、その後の全国試験に入試することができ、念願の「笹川医学奨学金制度」第9期生として、神戸市立中央市民病院のCCUに研修生として受け入れられました。

そして日本渡航前の1991年8月に北京人民大会堂にて開かれた「奨学金制度5周年記念式典」に出席することができました。当時中国衛生部陳敏章部長（大臣）、前任錢信忠部長（大臣）をはじめとする政府の要人、笹川財団笹川良一先生、日中医学協会石館守三先生を始めとする職員の皆様、また日本からの前任指導教官の先生方と7期までの研究生の方々の盛大な式典は深く心に残っております。その時祝賀会での笹川良一先生の「世界は一家、人類みな兄弟、日中医学の発展のため、日中人民の親善友好のために乾杯！」の礼堂に響き渡った音頭の響きいまでも覚えております。

研修先の神戸市は山を背に海に囲まれた美しい港町で、市立中央市民病院は日本国内でも有数の急性期医療・救急医療・高度医療を有する素晴らしい医療施設であり、様々な学会と専門分野育成の認定施設でもありました。CCUの場合、救急外来を経て入院される心筋梗塞や狭心症などの急性期の病気に対して、綿密な治療プログラムとリハビリプログラム、看護プログラムが作成され、医師と看護婦は一丸となって患者さんの状態把握と管理に努め、常に迅速に変化に対応し、高度な機能を有するプロフェッショナルの組織でありました。研修の一年間は、日中医学協会と研修先の大町信子看護部長の下、看護部の皆様の行き届いたご配慮をいただき、感謝の気持ちは忘れることがございません。

その後私が再び日本に渡航したのは、一人の生活者でしたが、それまでは社

会主義国の地方公務員であり、生活も職場も保障されるものでしたが、神戸市須磨区に暮らし始めた時からすべては個人の責任で生活し、自分の努力で社会に生きることの始まりでした。言葉の壁、日本人と違うことの差別にもがき苦しみました。心を支えて来たのは同じ人間としての尊厳と「笹川医学奨学金制度」の一員であったプライド、社会に認められたい気持ちでした。神戸地震の天災を生き、大東京に立足し、すでに18年の日々が流れています。

この18年間、私は徐々に日本と中国の長い文化の交流の流れを知ることができました。

日本と中国には実に2000年に及ぶ友好往来の歴史がありながら、近代の百年間の歴史は、1978年に「日中平和友好条約」を締結するまでは、おおむね対立と抗争、侵略の歴史でありました。しかし、その暗い歴史の中にも日本には侵略戦争を反対した民衆運動があり、日中医学協会新理事長、安達勇先生のご家系のように4代にわたり中国をこよなく愛し、戦時の中国の革命に生死をともにされ、4代目の安達勇先生は、「日中笹川医学奨学金制度」初期よりこの事業にご尽力され、今でも研究者を育成するために精力を尽くされております。今期の「同窓会報」に紹介された日中間の交流を拝見し、あらためて歴史の重みを実感することになりました。

また、東西冷戦が続く1968年9月に、日中国交に光を当てた池田大作先生の「日中国交正常化提言」が発端となり、1972年8月に田中角栄首相によって国交正常化が実現され、長かった敵対の歴史の車輪がようやく親善友好の方向に動くようになりました。1974年12月5日に周恩来総理はがんの手術を終えたばかりの御身体で医師団の反対を押して池田大作先生と会見し、「残された四半世紀でアジアと世界の平和へ確固たるレールを敷きたい、そして二十一世紀の中日友好を断じて成し遂げてほしい」と池田大作先生に託されたことを知ることができました。今年も東京八王子の創価大学庭園植えられている、「周桜」（周恩来総理の桜の木）は美しい桜を咲かせ、訪れる人びとに中日友好の歴史を物語っています。

日本の暮らしの中で、自然の美しさはいつも感動受けるものです。美しい海の逞しい浪打ち、どこまでも青青しい植物、春に一斉に咲く桜の花、台風の季節の雨と風の音はそのまま自然の息吹を運んで来て、生きていることを気づかせてくれるような気がします。

この自然豊かな環境の中で暮らしながら自然とは、大気であり、水であり、太陽の光であり、土であり、植物であり、温度であり、湿度であり、地球や月日を動かせる力であることがわかりました。人間もこの自然の中の生き物であり、美しい自然があってこそ健康があることがわかりました。

今年、4月15日～17日に思いもよらず、北京に出張し中華国際医学交流基金会主催の「中華健康管理論壇」に出席することができました。大会は中華予防

医学会、中華看護学会、中国保健学会、などの団体の支持のもと、各方面の専門家、600名ほどの健康管理業界の従事者の方々が参加されました。

非常に感銘を受けたのは、健康を国の持続的発展の最重要資源と位置づけ、「国民の健康なくして経済と国家の繁栄はあり得ない」との考え方、取り分け現代社会の「病」ばかりをターゲットとする遅れた観念を根本から克服すること、「病」に投資するより「健康管理」に投資することの明確化でした。今後の健康問題は生物学的、環境問題、生活習慣と医療衛生の四つの要素をトータルで考え、中国独自の健康管理産業分野を創造することとし、中医学優位と西洋医学の良さを相互補完することが最善の課題であると定義されました。

嬉しいことに今回の「第三屆中華健康管理論壇会」に自分が携わっている「堀口還元電子医学」の「還元電子医学の基礎理論および臨床医学領域での応用」論文が特等賞に受賞されましたが、その内容は「還元電子医学は、電子学、物理化学、材料工学、高分子学、生物学を融合させた、臨床医療用、在宅医療用、予防医学、及び治療に応用する、副作用を伴わない新技術である。」ということでした。

「堀口還元電子医学」とは、香川県坂出市の堀口医院において実践されている医学のことです。「堀口還元電子医学」では、病気の根本原因は人の生命活動の基本単位である細胞環境の酸性・酸化にあると考え、当医院長堀口裕先生は細胞機能評価法として「赤血球細胞内新陳代謝スケール評価」法を発明し、その治療法としてMI エナジーという治療器を発明しました。

上記の細胞機能評価法「赤血球細胞内新陳代謝スケール」法は、日本、アメリカ、欧州、シンガポールに特許として認可され、糖尿病の前期、動脈硬化の前期の評価、病気の治療過程の評価、未病状態評価に応用されています。「還元電子医学」では細胞の元気度、免疫系の元気度、炎症抑制能力を自己防御力の三本柱とし、そのトライアングルの関係が健康、亜健康、病気、治療過程の確認指標となると考えています。

今、新たなウイルスに関して堀口裕先生は、地球環境がだんだん変わり、ウイルスがどんな形で出現するか予想できないが、自己防御力が強ければたとえ感染しても生きる確率は高いと述べています。2006年に米国FDAの審議を経て、ハーバード大学とデューク大学で行われた治験によって還元電子治療はC型肝炎患者のGOT値、GPT値の減少、CD4免疫細胞の増加、QOL向上が顕著であることが認められました。また、杭州市第6人民病院(時代強医師共同)にてHIV/IADS感染症の治験が行われ、HIV-RNA定量の変化、CD4陽性Tリンパ球数、CD4/CD8比、体重共に原著の改善が認められ、去年10号の日本の「化学療法の領域」に発表しました。

去年、堀口裕先生は袁世華先生と私の努力により長春中医薬客員教授として招かれ、去年当大学にて計3回の講演を行い参加された大学生、大学院生と大

学校側より高い評価を受けております。

「笹川医学奨学金制度」は実に貴重な両国間の医学の専門家たちの交流をつくり、その創舉がもたらす医学の発展や文化に与える影響は多大なものであると信じております。中日、日中友好の道を開いた先人たちに学び、国は違いますが、互いに尊重し、互いに力を合わせ、これからより明るい未来をつくっていくことが研究生のひとり一人の責任であると感じております。

2年前、私は自然医学の普及、環境保全を事業理念に法人、光華株式会社を設立し、日本の友人の方々のご協力ご支援のもと、仕事をさせていただいております。私の生きる道に大きい影響をもたらし、長きに渡りお世話になりました日中医学協会、日本財団の方々に心より感謝の気持ちを申し上げます。

中日、日中両国の親善友好が新たな時代を迎えますよう祈りを捧げさせていただきます。